

博士学位論文審査報告書

申請者氏名: 小尾 淳

論文題目: 「タンジャーヴールの宗教芸能バジャナ・サンブラ
ダーヤの変貌 ―楽曲レパートリーに着目して―」

学位の種類: 課程博士(甲) 博士(アジア地域研究)

論文審査委員: (主査) 井上 貴子

(副査) 田辺 清

(副査) 鈴木 正崇

(慶応義塾大学教授)

平成 25 年度博士學位論文審査報告書

学位申請者：小尾 淳

大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻博士課程後期課程 3 年次在籍

学籍番号：090251151

申請学位：課程博士 博士(アジア地域研究)

論文題目：タンジャーヴェールの宗教芸能バジャナ・サンブラダーヤの変容
—楽曲レパートリーに着目して—

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 学位請求論文受理

平成 25 年 9 月 30 日、小尾淳は、大学院アジア地域研究科に対し、博士(アジア地域研究)学位請求論文を所定の申請書等を添えて提出し、仮申請を行った。10 月 1 日、学位論文資格審査委員会が開催され、学位請求論文の体裁と提出要件の審査を行い、仮申請の提出要件を満たしていることが確認された。同日開催のアジア地域研究科委員会は、資格審査委員会の報告を受け、2 週間の事前開示に供することを決定した。10 月 15 日、資格審査委員会は事前開示において疑義は提出されなかったことを確認し、同日開催の臨時アジア地域研究科委員会では、資格審査委員会の報告を受け、本申請に進むことが承認された。それを受けて、10 月 31 日、小尾淳は、大学院アジア地域研究科に対し、学位請求論文に申請書等を添えて提出し、本申請を行った。

3. 審査委員会

平成 25 年 11 月 12 日、アジア地域研究科委員会は、小尾淳の博士学位申請を受理し、審査委員会を設置することを決定した。11 月 20 日、学長決済により、小尾淳の博士学位申請の受理が承認され、博士学位論文審査委員会委員が、以下の 3 名に委嘱された。

主査 井上貴子 本学大学院アジア地域研究科 (国際関係学部国際文化学科教授)

副査 田辺 清 本学大学院アジア地域研究科 (国際関係学部国際文化学科教授)

副査 鈴木正崇 慶応義塾大学文学部教授

同日、審査委員会が組織され、小尾淳の学位請求論文の審査を開始した。審査委員会は学位請求論文を査読し、平成 26 年 1 月 12 日、全員一致で口述試験に進むことが認められ、1 月 21 日、小尾淳の学位請求論文にかかる口述試験を 2 月 7 日に公開で行うことが公示された。

2 月 7 日午後 4 時 30 分より大東文化会館にて、約 1 時間半にわたって、博士学位申請者小尾淳に対する口述試験が公開で行われた。

口述試験終了後、審査委員会はその結果について協議し、それをふまえて最終結果の報告書を取りまとめた。

4. 論文概要

本論文は、タンジャーヴール(現インド、タミルナードゥ州)で成立したバジャナ・サンブラダーヤと呼ばれる宗教芸能で歌われる楽曲レパートリーに焦点をあて、その変容過程を明らかにするものである。バジャナ・サンブラダーヤとは、神の名を唱えて解脱に至るナーマ・シッターンタ(神の名号の教義)を思想的基盤とし、神に一心に愛を捧げるバクティ運動で活躍した楽聖たちの宗教的な内容の歌を主たるレパートリーとし、歌いながら宗教儀礼を行うものである。西インドを本拠地とするマラーターによる支配が南インドのタンジャーヴールに及ぶと、歌を交えて民衆に教えを説く西インドの宗教芸能キールタンの影響を受けて、19 世紀初頭にバジャナ・サンブラダーヤの様式が体系化された。

第 1 章では、バジャナ・サンブラダーヤの基本的な特徴を概観している。ナーマ・シッターンタの教義とそれを基盤とする信仰形態ナーマ・キールタナ、その実践者であるバーガヴァタルと呼ばれるバラモン男性、バジャナ・サンブラダーヤの典型的な様式や実践の機会、楽曲形式や楽器の説明がされている。

第 2 章では、バジャナ・サンブラダーヤの主要なレパートリーに含まれる楽曲の成立について、バクティ運動との関わりの中かで説明されている。12 世紀ベンガル地方の詩人ジャヤデーヴァ、15～16 世紀アーンドラ地方のターツラパーカ詩人たち、最後にマハーラーシュートラ地方の聖者たちの作品について取り上げられている。

第 3 章では、バジャナ・サンブラダーヤの体系が成立した時代、すなわちタンジャーヴ

ール・マラーター支配下における宗教と芸能の密接な関係が概観され、この時代までに蓄積された多様な楽曲を組み合わせて、サットグル・スワーミが祭礼体系としてのバジャナ・サンプラダーヤを成立させるまでの経緯が説明される。楽曲の置き換えが可能な柔軟性の高い構造をもっていたため、後世のバーガヴァタルにレパートリーの組み換えと再解釈の余地を残したことが指摘されている。

第4章では、英領時代に音楽文化の中心地がタンジャーヴールからマドラスに移動し、タミル語を推進する言語ナショナリズムの高まりのなかで、マドラスに移住したバラモン音楽家たちによってバジャナ・サンプラダーヤの実践機会が増加し、楽曲レパートリーを収録した歌集の出版や楽曲の追補が相次いだことが指摘されている。

第5章では、独立後のバジャナ・サンプラダーヤのレパートリーが検討されている。独立インドにおける「伝統」の再評価の機運に伴い、埋もれていた芸能の発掘や楽聖の存在に目が向けられ、歴史的に位置づけ直す作業が活発化する。一方、80年代に入るとライフスタイルの変化に伴い、バジャナ・サンプラダーヤに対する関心は薄れていく。そこで、バーガヴァタルたちは、演奏技術や作曲活動等新たな方向性を打ち出して信徒を獲得しようと試みていることが指摘されている。

第6章では、90年代以降の経済開放下におけるメディアの発達やIT革命等により、バジャナ・サンプラダーヤの実践機会が著しく減少する中で、バーガヴァタルたちがいかに生き残りを模索しているかが検討されている。これまでは主に楽曲の追補によって差別化が図られてきたが、今日では古典音楽を模した演奏スタイル、「伝統回帰」といえる楽曲選択などの試みが存在することが指摘されている。

最後に、バジャナ・サンプラダーヤは、「伝統」の型を残しつつ、楽曲レパートリーを時代に合わせて柔軟に変化させることで生き残ってきたと結論付けられている。このような「伝統」の再解釈の過程は芸能の実践者であるバーガヴァタルと信徒たちの間の交渉の結果であり、バーガヴァタルが自身を芸能の主流に位置づける作業でもあったことが指摘されている。

5. 審査講評

(1) 本論文の成果

本論文は以下の点において優れており、南アジアの宗教と芸能の研究に大きな貢献をなすものと考えられる。具体的には以下のようにまとめられる。

① これまで系統だった調査研究がほとんどなされてこなかった、南インドの宗教芸能バジャナ・サンプラダーヤに焦点をあてたという点で、新規性に優れている。この宗教芸能は特殊であると同時に、他の宗教芸能、例えば鎌倉仏教やイスラームのズィクル、キリスト教の托鉢修道会等との共通点も見出せるという点で、一種の普遍的な性格も有している。したがって、本論文の研究成果は、広く他のさまざまな宗教芸能の研究にも重要な貢献をなすものとみなすことができる。

② バジャナ・サンブラダーヤの知られざる実態を、豊富な現地経験に基づく入念なフィールドワークによって明らかにしたという点は高く評価されるべきである。とくに現在活躍中のバーガヴァタルに対するインタビューに、申請者の南インド古典音楽に対する知識の蓄積が生かされている。現代インドの激動する社会と「伝統」を標榜する宗教芸能との関係を明らかにするという作業にとって、申請者の行ったフィールドワークは、非常に重要な資料と知識とを提供するものである。

③ バジャナ・サンブラターヤに含まれる楽曲のレパートリーが、その基本様式が成立した19世紀から現代に至るまで変容し続けてきたことに着目し、バーガヴァタルたちが、社会変動や時代の要請に応じて新たな楽曲を追補し、レパートリーを組み換え、常に「伝統」を更新し続けてきたとする見解は説得力をもっている。

(2) 本論文に残された課題

バジャナ・サンブラダーヤのレパートリーの変遷に着目した点は新しく、「伝統」の再解釈または更新という文脈での分析も一定の説得力があるが、以下のような問題点や課題も指摘された。

① インド音楽史あるいは芸能史として、バジャナ・サンブラダーヤをどのように位置づけるべきなのかが明確ではない。口伝による音の歴史を構築するのは困難な作業であり、レパートリーの変遷に着目せざるを得ない側面もあるが、表面的なレパートリーの変遷のみならず、含まれる楽曲の歌詞の内容など、バジャナ・サンブラダーヤそのものの内容の分析がもっとあるとよい。

② とくに2章・3章のバジャナ・サンブラダーヤの歴史叙述では、過去の史実と現代の実践や解釈、議論が入り混じっている。明確に分けて論じるべきである。また、社会的政治的な変動についての記述が、バジャナ・サンブラダーヤの変遷に関する記述と有機的な文脈を構築することなく書かれており、違和感がある。

③ バジャナ・サンブラダーヤという名称自体は1956年以降に名づけられたものであり、このような命名行為そのものが極めて現代的な現象である。「サンブラダーヤ」は安易に「伝統」と訳すべきではなく、その命名の意味にも注目すべきである。その他の現地語の訳語についてもさらなる検討が必要である。

④ 19世紀以降の音楽界の激変は、文字化・組織化・情報化・商業化・都市化といった用語により整理する必要があるだろう。例えば印刷された歌集の出版は、出版資本主義に基づくナショナリズムのローカルな読みかえと捉えることができる。

⑤ しばしば、特定の宗教芸能の歴史は芸能の実践者と村や寺院等との深い結びつきによって伝承されてきたが、バジャナ・サンブラダーヤと地域社会との関係が明白に論じられていない。

⑥ バジャナ・サンブラダーヤは「伝統のねつ造」といえる側面をもっているだろう。その際に文化的ヘゲモニーを握るのは誰かが問題となる。文化的ヘゲモニーには正統性と

正当性の二側面が存在し、こうして実践されることによって文化は資源化され、文化財とみなされるようになる。フィールドワークによって収集された資料を適切に整理分析し、理論化する必要がある。

以上、博士学位請求論文に対しては審査委員から多面的な講評が提出された。当該論文にはまだ克服すべき課題が多く残されている。とくに、フィールドワークで収集された多くの資料の分析と理論化についての課題は多い。しかしながら、提示された資料は申請者による地道なフィールドワークの蓄積の成果であり、従来のヒンドゥー教芸能の研究に対して多大な貢献をなすものである。また「伝統の再解釈」という結論にも一定の説得力があり、インド文化の研究として十分な水準を満たしていると判断できる。

6. 審査結論

審査委員会全員一致で、小尾淳の博士学位請求論文が、博士の学位にふさわしいものの結論に達した。